

客家土楼における子どもの養育環境に関する研究

劉, 秀鳳

<https://doi.org/10.15017/1785453>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	劉 秀鳳			
論文名	客家土楼における子どもの養育環境に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	南 博文
	副査	九州大学	教授	坂元一光
	副査	九州大学	教授	藤枝 守

論文審査の結果の要旨

現代の多くの都市環境の中で養育する者にとって、子どもの遊びを安心して受容できる環境の支えが欠如していることは、広く認識された社会の問題であり、その解決に向けた地域コミュニティのあり方が問われている。

本論文は、教育人類学的なエスノグラフィ研究によって中国福建省西部にある伝統的な集合住宅様式である客家土楼の成立過程と現状を把握し、さらに生態学的心理学のアプローチによって土楼における子どもの養育環境と空間構造との相互連関を明らかにし、現代都市部の集合住宅における子どもの養育環境の困難さという問題への解決方法に示唆を探ったものである。

具体的には、福建省西部の龍岩市、漳州市の土楼群におけるフィールドワークを通して、土楼の類型として世界遺産化による影響と観光地化による影響とによる4種のタイプを区別し、都市部への流出と共に、客家土楼に帰還する人口の逆流現象が起きている背景を明らかにした。またBarkerら(1968)の生態学的心理学の理論に基づいて「日常生活行動場面」という独自の概念を考案し、現地調査に基づいて子どもと大人の生活行動の重なりを捉え、それが土楼における中間的な領域に集中していることから、これらを「行動のまとまり場」として概念化した。さらに大人の生活行動との関係から養育環境が空間の構造によって支えられているメカニズムを生態学的心理学的モデルとして提案している。土楼の空間的な閉鎖性と内部における住民どうしの生活行動の開放性を、「同族集住感覚」として概念化し、父系血縁関係を中心とした多様な人間関係の基盤の上に広場、大門(入口)、門庁(ロビー)、回廊などの中間的な空間において、大人と子どもの相互の視認関係があり、両者の生活と遊び行動が有機的に融合した安心な空間が実現している現状を、生態学的心理学的モデルとして整理した。さらに、客家土楼から得られる現代の集住環境への適用として、1) 子どもと大人が同時に空間を共有する必要性、2) 中間的領域の重要性、3) 日常生活の外部化を促す空間配置、という3つの原則を導き、集住環境の設計における具体的なガイドラインを提案している。

本研究成果は、従来建築的な側面からの研究に限られていた客家土楼に関して、現在の生活の具体的な姿と養育環境の特質の側面からアプローチした研究であり、生態学的なモデルを呈示するという新しい知見を加えたものであり、ユーザーの視点から客家土楼の現代的意義を明らかにした価値ある業績と認められる。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、平成28年8月17日18時から統合新領域学府7階多目的演

習室において、劉秀鳳氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、調査委員及び出席者から土楼の空間構成の特色、所有権の現状、同系家族以外の者の流入、客家文化の特殊性と現代の集住環境への適用の妥当性、などに関する質問が行われたが、いずれもが劉秀鳳氏による的確な回答がなされ、また、これらの質疑応答において同氏が関連する領域について十分な学識を備えていることが示されたので、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、劉秀鳳氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。